

別寒辺牛川水系及び厚岸湖・厚岸湾に生息するイトウ *Parahucho perryi* 成魚の 行動生態の解明

鍵和田 玄*・本多 健太郎**・高橋 伸幸*・宮下 和士**

* 北海道大学大学院環境科学院 ** 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

【背景・目的】

イトウ *Parahucho perryi* はサケ科イトウ属の魚で、成長すると全長 1.0m 以上に達する日本で最も大きな淡水魚である。近年、イトウが生息する河川が環境が悪化したことにより、その数が大幅に減少し、絶滅危惧種 IA 類 (CR) に指定されている。イトウの絶滅を防ぐためには保護の計画を考えていかなければならない。そこで、保護をどのように行う必要があるかを計画するために、イトウが 1 年を通していつ・どこに生息しているかを知る必要がある。

北海道東部別寒辺牛川水系において 2007 年以降行われているイトウ調査の結果から、イトウは河川の上流域から下流域に至るまで、広い場所に生息していることがわかった。また、中上流域に生息するイトウはあまり移動せず、下流域に生息するイトウでは広範囲に回遊するといった、流域の違いによって異なった戦略をとることも明らかとなった。また、イトウは水温 20℃ 超える日が多い暑い夏には下流域の高水温を避けるために中上流域へ移動し、同じ夏であっても高水温を記録する日が多い夏では下流域にも生息することがあると考えられた。

しかし、これまでの結果は、年ごとに違う個体を追跡することで明らかになったものであり、同じ個体を 2 年間追跡した例はない。そこで、本研究では前年までと同様の手法を用いて、2010 年に放流した個体を追跡した。

【方法】

2010 年の春に捕獲し、超音波を発する発信器を装着して再度河川に放流したイトウを、そのイトウが発する超音波を受信する受信機を用いることで追跡した。受信機は河川の上流から下流まで 18 箇所に設置するとともに、受信機を搭載したカヌーで河川を下ることで、イトウがいつどこにいるかを追跡することで出来る。さらに、水温記録計を受信機と共に設置することで 30 分おきの河川水温を記録した。そして、イトウの移動パターンと水温などを比べ、関係性を調べた。

【結果】

2011 年と 2010 年の結果を比較すると、季節毎のイトウの行動パターンは全体的にみて大きな違いはなかった。どちらの年も河川全体を利用しており、特に夏は河川の中で比較的暑くない中・上流域に移動する傾向が見られた。水温も両年の間に大きな違いはなかった。また、個体別に 2011 年と 2010 年の結果を比較した場合でも、行動パターンに大きな違いはなかった。つまり、2011 年に特定の場所に長期間滞在する個体は 2010 年も同様の行動をとっており、2011 年に下流から上流まで動き回っている個体は 2010 年も動き回っていた。

これらのことから、同じイトウの集団、さらには同じイトウは、年が変わっても同様の行動パターンを採ることが考えられる。